

「ソクラテスの弁明」

プラトン(著) 久保勉(訳)

岩波文庫 1964年8月16日刊

本書は、ペロポネソス戦争後の紀元前399年、「ギリシャの神々を信仰せず、青年に害毒を与える者」として市民階級を代表する3名の告発者によってソクラテスが訴えられた時に、公判の席上で500人の陪審員と市民聴衆の前で行った弁明演説の記録である。

ソクラテスはプラトンの著作に描かれているように、市民との対話を通して真理を求め、誤りを指摘するという哲学的行動を一貫してとり、官職や軍の指揮などにはかかわらない市井の哲学者であった。しかし、彼の影響力は優秀な青年を中心に絶大なものがあり、当時の為政者たちがいかに間違っているかを指摘するソクラテスの言動は為政者にとってはしゃくの種であった。その事実により政治的な危機を感じた為政者がソクラテスを訴えたというのが裁判の実情である。裁判結果は有罪280票、無罪220票ということで、最終的にはソクラテスの死刑が確定したのである。

ソクラテスは真理を追究することを裁判によって止めさせることは出来ないと主張し、むしろ為政者たちが善人になるように努力すべきであると説き、またその支持者に対しては真理を追究する態度を保ち、善人でいれば、死をおそれることはないと言っている。

裁判の告発者であるメレトスとその後ろ盾であった政界有力者アニュトスとともに30人独裁政権を倒して民主政治を再建した市民であった。われわれはこの事実の重さを受けとめる必要がある。すなわち、民主政治は即、平和や真理の獲得をもたらすものではなく、逆に、民主政治の抱える様々な問題を指摘する少数の人間を多数決の暴力によって抹殺してしまうという恐ろしさを内包した制度だということである。この衆愚政治とも呼ばれた民主政治のもつ欠陥によって、アテナイ最高の知識人であるソクラテスを失ってしまったことが当時のギリシャの知識人に与えた影響は計り知れない。

この裁判のもう一つのパラドックスは、ソクラテスは衆愚政治を批判し哲人政治を主張していたとはいえ、裁判の手続きの不備や投票結果に強く反論することなく、判決を受け入れたということである。イギリスの首相チャーチルは民主主義は最悪の政治制度の中では最もましなものだと言ったが、まさにソクラテスもその欠陥のある制度の犠牲になりつつも、民主主義を否定することはなかったということである。民主主義はよほどの努力をしなければ正常に機能しない制度ではあるが、それを維持することの価値をソクラテスが身をもって示してくれたのだと解釈できないだろうか。

なお、本書の岩波文庫版は訳が古いので、『世界の名著 プラトンI』(中公バックス)に収められた田中美知太郎(訳)の方が読みやすいかもしれない。